

監修

佐佐木信綱
柳田國男
新村出
山田孝雄
津田左右吉
和田哲郎

中古三女歌人集

佐佐木信綱校註

朝日新聞社刊
日本古典全書

日本古典全書

「中古三女歌人集」 佐佐木信綱校註

昭和二十三年六月三十日初版發行

昭和三十一年四月十五日四版發行

印刷所 株式會社東和印刷

發行所 朝日新聞社（東京都千代田

區有樂町・大阪市北區中之島・

小倉市砂津・名古屋市廣小路）

定價 二〇〇圓

序

紫式部、清少納言、和泉式部の麗筆が、春の花と咲きさかえたのは、一條天皇の御代であつた。式子内親王、建禮門院右京大夫、俊成卿女の想華が、秋の紅葉とにほうたのは、平安末期から、鎌倉の初期へかけてである。しかもかれは、華麗な平安盛時の文化を象徴してをり、これは、平家滅び源家興る時代の反映を帯びて、一抹のうらさびさがただようてをる。

式子内親王の情熱的作歌が、和泉式部を源としたものといはれるならば、俊成卿女が地水火風空の短篇は、枕草子の一節のたぐひともいへよう。右京大夫の筆は、源語に比べては花のものとの深山木ではあるが、平家物語の縮圖ともいつてよい。かの女の人間哀史一卷は、永く沈痛の響きを世に傳へるであらう。

右京大夫の歌は、當時にあつてさへ、新古今集の選にも入らないで、新勅撰集によつてやうやくその名を知られた。その集は、寛永に萬治に刊行され、群書類從に收められもしたが、なほ人知らぬ深山がくれの花ともいつてよいのであつた。自分は、はやくかの女の集を読み、いたく心を打たれたので、世に紹介したのであつたが、今また、式子内親王集、俊成卿女集とともに、ここに一卷として公けにすることは、まことに因縁が浅くないやうにおもはれる。

目次

序

式子內親王集

解

說

凡

例

本

文

春

九

夏

二

秋

三

冬

四

戀

五

雜

六

目次

一

目次

二

春	八
夏	九
秋	三
冬	三
戀	四
旅	五
山家	五
鳥	六
祝	六
春	七
夏	六
秋	三〇
冬	三
戀	三
雜	四

雖入勅撰不見家集歌

建禮門院右京大夫集

解 說

凡 例…………… 八三

本 文…………… 八三

俊成卿女集…………… 一七一

解 說…………… 一七三

凡 例…………… 一七六

本 文…………… 一七八

百首の中に…………… 一八〇

月花五十首…………… 一八一

北山三十首…………… 一八四

衛門督の殿への百首…………… 一八六

詠百首和歌…………… 一八九

式子內親王集

佐佐木信綱

解 説

式子内親王集は、内親王自選の集ではなく、後人が、三度の百首と、勅撰集のなかに掲げられたものとをもとにして、一書に纏めたもののやうである。

内親王は、新古今時代を代表する女歌人であるが、傳記は明確でない。僅かに、明月記・家長日記・齋院記・皇胤紹運錄などをもととして、その一端を知り得るに過ぎない。生年も明らかでないが、同腹の姉君殷富門院の年齢から推して、仁平ごろかといはれてゐる。建仁元年正月二十五日に薨去せられた。御父は後白河天皇、御母は藤原季成の女高倉三位局成子で、源三位頼政が奉じて兵を擧げた以仁王と同腹の皇女であられる。母系はいづれも文雅の道に優れ、公實・實行・公教・實房、すべて勅撰集の歌人である。内親王は、平治元年以後十一年間、賀茂齋院にあられ、准三后の待遇を受けられたが、嘉應元年七月、病で退かれた。のちに薙髮せられ、法名を承如法といはれた。正治二年には、弟君高倉天皇の孫皇子である後の順德天皇（當時四歳）を猶子とし給うたが、その前年ごろから病が重つてつひに薨ぜられた。明月記正治元年、同二年の條には、御病狀の委曲が記されてゐる。

内親王は、平安時代の末期から、鎌倉の初めにかけて、源平興亡の世に、波瀾の多い一生を過し給うた。殊に、御血縁の間には、崇徳天皇(叔父)以仁王(兄)安徳天皇(甥)といふやうに、つぎつぎに時運に殉じ給うたのである。内親王の御歌に漂ふ哀感は、このやうな時勢を背景として、理解される點が多い。また、藤原俊成がものして建久八年に内親王にささげたのが、有名な古來風體抄である。内親王を、高倉宮、大炊殿、大炊御門齋院、萱齋院とも申しあげる。

内親王の歌は、傳はつてゐるのは多くはなく、すべてを合はせて約三百八十首に過ぎない。しかし、御歌才をうかがふには、これだけでも遺憾はない。勅撰集では、千載・新古今以下、新勅撰・續後撰・續古今・續拾遺・新後撰・玉葉・續千載・續後拾遺・風雅・新千載・新拾遺・新後拾遺・新續古今の十三代集のすべてに採られてをり、ことに新古今に四十九首まで選入されたことは、特筆すべきである。集は、諸本によつて多少の異同があるが、大體三種の百首和歌と、集に見えない勅撰集の歌六十餘首の四部分から成つてゐる。このほかに、三百六十番歌合に載せられた歌三十六首中、他に見えないものが十六首あるので、總計約三百八十首が今日知られてゐる全部となるわけである。

後鳥羽院御口傳に、「近き世にとりては大炊御門前齋院・故中御門攝政・吉水僧正、これら殊勝なり。齋院は殊にもみもみとある様によまれき」と良經・慈圓と並べ稱してあり、徹書記物語には「戀の歌は女房の歌に、しみ入りて面白きが多きなり。式子内親王のいきてよも、我のみ知りてなどの歌

は、幽玄の歌どもなり」とある。新古今時代の女流歌人としての内親王は、女性らしい静和な美しさをたたへた調べ、哀切な情緒の表現、眞に一代の女流歌人であつた。本歌取りに巧みで、技巧的な作風ではあるが、その豊かな心情が背景にあるために、形式的な感じがしない。巧みな結構を、静かな調べでしらべなした抒情ゆたかなのが、その特色である。ことに戀の歌には、やるせない哀愁を深く包んだしめやかさが色づけられ、優れた作が多い。

つぎに、家集の諸本について述べると、多くは、一卷一冊（神宮文庫本は二卷一冊）で、内容は、元祿六年岡西惟中の序のある小型版本と異ならない。

校本としては、元祿本・安永本・文化版本などあり、ことに元祿版本には、小型本・大型本・繪入本がある。この三書は、いづれも掲載歌の内容を等しうするが、繪入本は、同八年十月刻の成つたもの、文化版本は、文化九年三月の上版に係り、清水濱臣の跋文があり、濱臣が校正したものである。

寫本としては、圖書寮本・神宮文庫本・國立圖書館本などが知られてゐるが、前二者は元祿版本系統のもの、後者は文化版本系統のもので、活版本には、續國歌大觀、國歌大系所收本があるが、終りの「雖入勅撰不見家集歌」は省かれてゐる。

參考文獻

中古三女歌人集

百人一首一夕話（卷八）

大日本史料（四ノ六）

式子内親王——新古今の歌人

式子内親王の御歌

定家と式子内親王

式子内親王集評釋

日本文學大辭典

松浦貞俊 國語と國文學 昭和五年二月號

石井直三郎 水甕 昭和五年一月號

川田順 心の花 昭和六年十二月號

風卷景次郎 短歌講座第八卷

凡 例

- 一、本文は、續國歌大觀所收本を底本とし、文化九年版本を校合して本文を定めたが、煩雜を避け、いちいちの校異はこれを記さなかつた。
- 二、讀者の便宜を圖り、假名遣ひを改め、また、漢字をあてもした。
- 三、底本には、卷末の「雖入勅撰不見家集歌」を省いてあるが、文化版本によつてこれを補つた。

式子内親王集

春

(一)山城國宇治郡。近江との國境にある。新古今集多「おとは山さやかに見する白雪のあけぬとつくる鳥の聲かな」など都人士が身近に雪を賞づる山として親しまれてゐた。

(二)萬葉集卷八「岩そそぐ垂水の上のさ嶽のもえ出づる春になりにけるかも」「たるみ」を「たるひ」とした本もあるが古本によつた。

(三)雷にはのかな色のさしくる意。

(四)「泡雪のあはれ」と續き「降り」と「古り」とをかけた縁語。

(五)「ぬき」は、衣の續絲。まだ咲き揃はない花を緯絲の薄い春の衣に譬へたもので古今集春「春のきる霞の衣ぬきを薄み山風にこそ亂るべらなれ」など類例が多い。

(六)源氏物語橋姫「あと絶えて心住むとはなければども世を宇治山に宿をこそ借れ」による。

(七)花のはころび咲くこと。

(八)紅梅の初花で染めたもの。古今集戀「くれないなるの初花染めの色ふかく思ひし心われ忘れめや」など類型が多い。

春も先づしるく見ゆるは音羽山峰の雪より出づる日の色

鶯はまだ聲せねど岩そそぐたるみの音に春ぞ聞ゆる

色^三つぼむ梅の木の間^二の夕月夜春の光を見せそむるかな

春くれれば心もとけて泡雪のあはれ^四ふり行く身を知らぬかな

見渡せば此面彼面にかけてけりまだぬき^五薄き春の衣を

あと絶えて^六幾重も霞め深く我が世をうぢ山の奥の麓に

春ぞかし思ふばかりに打霞みめぐむ梢ぞ詠められける

消えやらぬ雪には^七つるる梅が枝の初花染^八のおくぞゆかしき

- (一)古今集春「色よりも香こそあはれと思ほゆれたが袖ふれし宿の梅ぞも」とあるによる。
 (二)古今集春「散るとみてあるべきものを梅の花うたて匂の袖にたまれる」
 (三)花はいさ知らず、の意。
 (四)新古今集春に「百首の歌に」として入る。夢のやうな過去の忘却のうちに、花に心を盡した春の思ひ出の残るよしを述べた、こまやかに優しい作。
 (五)玉葉集春に「百首の歌の中に」として入る。花のつれなく散るを、自分もつれなく傍観しようものを、の意。
 (六)初句の呼びかけは新拾遺集秋に収められた作中にも見えてをり作者の好きな句らしく、下句は爛漫たる花の形容である。
 (七)古今集春「春霞いろの千ぐさに見えつるはたなびく山の花のかげかも」によつたもの。
 (八)對屋造りの雨水の落口をいふ。
 (九)吳竹の「よ」と「夜がれ」の「よ」

誰が宿の梅のあたりにふれつらむ移り香しるき人の袖かな
 梅の花戀しきことの色ぞ添ふうたて匂の消えぬ衣に
 花はいさそこはかとなく見渡せば霞ぞかをる春の曙
 はかなくて過ぎにし方を數ふれば花に物思ふ春ぞ經にける
 花ならでまた慰むる方もがなつれなく散るをつれなくて見む
 誰も見よ吉野の山の峰つづき雲ぞ櫻よ花ぞしら雲
 花咲きし尾上はしらず春霞千ぐさの色の消ゆるころかな
 春風やまやの軒ばを過ぎぬらむ降り積む雪のかをる手枕
 のこりなく有明の月のもる影にほのぼの落つる葉隠れの花
 鶯も物うく春は吳竹のよがれにけりな宿もさびしき
 故郷へ今はとむかふ雁がねも別るる雲のあけぼのの色
 けふのみと霞の色も立別れ春は入目の山のはの空